

TUFS news

01

東京外大の伝統と革新をつなぐ 第14代学長に 春名展生教授が就任

2025年4月、東京外国語大学の新学長として春名展生教授（専門：国際政治学、日本政治外交史）が就任しました。50歳での就任は国立大学としては異例の若さであり、今後の大学運営に新たな視点が期待されます。春名学長は「多言語・多文化共生の伝統を継承し、対話と協働を通じて持続可能で寛容な社会を創り出す人材を育てたい」と語り、教育・研究・社会連携の三位一体による運営を掲げています。東京大学工学部で都市計画を学んだ後、同大学院で国際関係論を専攻し博士号を取得。2015年に本学着任、2023年から副学長を務めてきました。今後は国内外の評価を高める大学改革に取り組むとともに、学生・教職員との対話を重視した開かれた大学づくりを進めます。



02

四大学未来共創連合が発足 東京から世界へ、 知の共創が始まる

2025年7月1日、本学は東京科学大学、一橋大学、お茶の水女子大学とともに「四大学未来共創連合（Future Leading Innovation Partnership：FLIP）」を発足させ、新憲章を締結しました。これまでの三大学連合にお茶の水女子大学が加わることで、東京という世界有数の学術都市に集う知の拠点が、より多様で革新的な連携体制へと進化しました。締結式は東京科学大学湯島キャンパスにて開催され、各大学の理事長・学長が出席。春名展生学長は「多文化共生と国際協力の知見を活かし、連合の中核として貢献していきたい」と語りました。FLIPは、教育・研究・社会貢献の三領域で連携を深め、分野横断



憲章調印式にて。各大学の理事長・学長。中央が本学の春名学長。

的な知の融合を通じて、持続可能な社会の実現を目指します。今後は、大学院レベルでの共同教育プログラムの構築や、地域密着型の共創研究、DE&I（ダイバーシティ・エクイティ&インクルージョン）推進など、多岐にわたる取り組みが予定されています。また、連携推進法人の制度も視野に入れ、より安定的かつ効果的な協働体制の構築が検討されています。学生交流や単位互換の拡充により、学びの選択肢が広がることも期待されています。

東京外国語大学は、言語・文化・国際関係の専門性を活かし、FLIPの中で「世界とつながる知の架け橋」としての役割を果たしていきます。

03

医療通訳養成講座が開講 多言語で医療現場を支える人材育成

2025年4月、本学は東京科学大学との連携により「医療通訳養成講座」を新規開講しました。英語・中国語・ベトナム語の3言語で展開される本講座は、医療現場での通訳に必要な専門知識とコミュニケーション力を養う履修証明プログラムです。外国人患者の増加に伴い、医療安全の観点から通訳の重要性が高まる中、本講座は医療従事者と患者の橋渡し役となるスペシャリストの育成を目指します。講義はオンライン中心で、実習も含まれた実践的な内容。本講座の履修者には履修証明書が交付され、チーム医療の一員としての活躍が期待されています。



病院実習の様子（2025年8月実施）

映画でつなぐ世界との対話

TUFS Cinema 10周年

東京外国語大学が主催する「TUFS Cinema」は、世界の多様な文化や言語に触れる機会を提供する映画上映イベントとして、2015年にスタートしました。学生・教職員のみならず、地域の方々にも開かれたこの企画は、上映後のトークセッションやゲストとの交

流を通じて、国際理解を深める場として親しまれてきました。10周年を迎えた今年も、これまでと変わらず定期的な上映会を通じて、映画を介した学びと交流の場を提供し続けています。映画を通じて世界とつながるTUFS Cinemaの挑戦は、これからも続きます。



TUFS Cinema ウェブサイト
<https://www.tufs.ac.jp/tufscinema/>

？ お問い合わせ

[月～金 9:00-12:00、13:00-17:00、祝日・一斉休業除く]

東京外国語大学 広報・社会連携課 TUFS Cinema 事務局

Email : tufscinema@tufs.ac.jp

卒業生の皆さまへ

同窓生情報データベースシステムへの登録のお願い

東京外国語大学では、卒業生（修了生）の皆さまとのつながりを大切にし、同窓生ネットワークのさらなる充実を目指しております。その一環として、「同窓生情報データベースシステム」へのご登録をお願い申し上げます。ご登録いただくことで、大学からの最新情報やイベントのご案内をお届けするとともに、交流の契機にもつながります。



同窓生情報データベース登録ウェブページ
<https://www.tufs.ac.jp/alumni/alumniadb.html>

？ お問い合わせ

[月～金 9:00-17:00、祝日・一斉休業除く]

東京外国語大学 アラムナイ室

TEL : 042-330-5546

Email : tufs-alumni@tufs.ac.jp

アンケートのご協力をお願い

広報誌をご覧いただきありがとうございます。東京外国語大学では、より魅力的で読みやすい広報誌づくりを目指し、読者の皆さまからのご意見・ご感想を募集しています。内容や特集の感想、今後取り上げてほしいテーマなど、率直なお声をぜひお聞かせください。

◎はぎ： 〒183-8534 東京都府中市朝日町3-11-1
東京外国語大学 広報・社会連携課 宛て
◎メール： koho@tufs.ac.jp
◎募集期間：2026年3月末まで

読者プレゼント

ご回答いただいた方の中から抽選で10名様に、東京外国語大学オリジナルQUOカード（500円分）をプレゼントいたします。商品の発送は2026年5月を予定しています。当選者の発表は発送をもって代えさせていただきます。



アンケートは左記の二次元コードまたはURLからご回答いただけます。皆さまのご協力を心よりお待ちしております。

<https://sanda.tufs.ac.jp/hp-renraku/gv/13/>

編集後記

今年、日本で「TICAD9」が開催されたことをきっかけに、本号では「つながるアフリカ」という特集を組みました。学生や教員、卒業生の声から、アフリカと東京外国語大学を結ぶ多彩なストーリーが見えてきます。留学や研究の場で文化や価値観の違いに触れ、育まれる視点や経験は、読者の皆さまにも新しい発見をもたらしてくれるのではないのでしょうか。連載コラムでは、インドの歌しりとり、カメルーンのマンゴロー村など、世界と響き合う感性を集めました。次号も東京外大と世界をつなぐ物語をお届けします。お楽しみに！（編集部）

編集：東京外国語大学 広報マネジメント・オフィス
窓口：広報・社会連携課
〒183-8534 東京都府中市朝日町 3-11-1
TEL：042-330-5151
編集協力：株式会社文化工房
デザイン：clip

© 東京外国語大学
本誌記事、写真、イラストなどの無断転載を禁じます。

tufspr2025102401

Globe Voice

グローブヴォイス

2025年10月発行

発行＝
東京外国語大学
広報・マネジメント・オフィス
〒183-8534
東京都府中市朝日町3-11-1

広報誌「Globe Voice」を発刊します。言語や文化の違いを超えて世界とつながる東京外国語大学の営みを、さまざまな声を通して伝えていきたい——そんな思いから、再び誌面をひらくことにしました。学生、教職員、卒業生、そして本学に関わる人々のまなざしから見てくる、今を生きる多様な感性や価値観に出会っていただけたら幸いです。

Tokyo University of Foreign Studies Magazine

Globe Voice

東京外国語大学

2025, Number 13

特集

つながるアフリカ…………… 01

連載コラム

聴く…………… 06

五感でふれる…………… 07

歴史を刻む在学生…………… 06

TUFS news…………… 08

特集

つながるアフリカ

Connecting with Africa



カメルーン共和国の北西州、および西州に広がる草原地域・グラスフィールドに暮らす民族の伝統衣装を着た留学生のジャットさん（博士前期課程 Peace and Conflict Studies7 履修生）と、オシクさん（博士前期課程 Peace and Conflict Studies7 履修生）（略称：PCS）（在籍）

開米さん（写真左・国際社会学部 アフリカ地域専攻在籍）と、オシクさん（写真右・国際社会学部ラテンアメリカ地域専攻在籍）

個人の点と点のつながりが 広く面的なつながりに

多くの日本人にとって、アフリカは今なお「未知の大陸」かもしれません。しかし歴史を振り返ると、実現はしなかったものの1930年代にエチオピアの王族と日本の華族の縁談が持ち上がったこともありました。その後、1970年代に入ると青年海外協力隊がアフリカで活動するようになり、日本はアフリカとの関係構築を草の根レベルで積み重ねていきます。

1963年、日本政府はアジア・アフリカ諸国に関する学術研究を推進するため、日本学術会議へ共同利用研究所の設立に関する勧告をしました。これを受け、1964年に東京外国語大学に「アジア・アフリカ言語文化研究所（AA研）」が附置されました。

一方でAA研ができる前から仕事で駐在するなどアフリカと関わりのある卒業生は多く、アフリカに対する関心やつながりは連綿とあったのです。例えば1963年に本学を卒業した佐藤芳之さんは、単身アフリカへ渡り「ケニア・ナッツ・カンパニー」を起業。世界屈指のマカダミアナッツカンパニーとなるまで会社を成長させ、アフリカ各地の雇用

拡大や人材育成に力を注いできました。

それから長い年月を経て、2012年に国際社会学部アフリカ地域専攻、2017年に現代アフリカ地域研究センターなどの教育・研究の場が誕生し、本学からアフリカに留学する学生、またアフリカから本学への留学生も増えてきました。1993年から始まったアフリカ開発会議（TICAD）がきっかけとなり、計り知れないポテンシャルを秘めたアフリカに対する国や企業の関心も高まっています。

個人の点と点のつながりだったものが、徐々に広く面的なつながりになりつつあるのが現状と言えるでしょう。

アフリカを知ることは 自分自身を知ることもある

アフリカは、何度現地に足を運んでもそのたびに新しい発見があり、想像もしないことが起こります。自分の価値観やものの見方がある意味で覆される体験です。今まで自分が考えていた「幸せ」や「豊かさ」の概念は、あくまでも日本の社会の中で作られたものであると気づくでしょう。日本人として生きてきた経験や、日本の社会のあり方を相対的に見る機会を与えてもらえること、それがアフリカ研究の面白さです。アフリカを知ることは、日本を、そして自分をよく知ることもあるのです。



東京外国語大学
Tokyo University of Foreign Studies

特集
つながるアフリカ
Connecting with
Africa

アフリカの大学に留学した人、アフリカから日本へ学びに来た人、
現地で仕事をしている人、交流のためのイベントをする人……切り口はさまざまでも、
アフリカと真摯に向き合う東京外国語大学の学生と卒業生たち。

彼らの目に「アフリカと日本」はどのように映り、
またそこから何を感じたのでしょうか。生の声を聞いてみました。



伝統衣装を着たザンビア大
らの交換留学生ムクマさん。
にかけているのは両親から
ゼントされた大切なバッグ。

中央アジア地域を専攻する新井さんは、アフリカにも関心を寄せ、「アフリカンウィークス」の企画に参加した。アフリカ料理店にもよく足を運ぶ。

箱に固定された金属の
で弾いて演奏するア
統楽器、親指ピアノ。

マンカラと呼ばれる豆を使う世界最古とも言われる、アフリカが起源と伝わるゲーム。

memo

東京外国語大学 アフリカンウィークス

アフリカの魅力を伝えるために、2017年度からほぼ毎年、アフリカに関心を持つ学生有志たちによって実施されてきたイベント。

2025年度は通算7回目の開催。コンセプトは、「アフリカ、アフリカラー！」。

「アフリカ」と一言で言っても54もの国があり、自分たちが想像する以上に多様な社会であることを、さまざまなアプローチで発信しました。

テンボさん(博士前期課程)



TUEFS African Weeks 2023

違いを知り、
向き合うことを諦めては
いけない

アフリカンウィークス2025実行委員会代表
国際社会学部 アフリカ地域専攻 4年
デンベレ フアトウマタ 花菜さん DEMBELE Fuatoumatahana

アフリカ地域専攻だけでなく、授業などをきっかけにアフリカに興味を持つ
た。私が主に関わった催しは、留学生制作の映画『Queen of Inanga』
ガルの楽器「コラ」の奏者・杵淵ひろさんを迎えてのトークショー、留学生
によるダンスパフォーマンスなど、様々なイベントが開催された。中でも印象的

違いを知り、
向き合うことを諦めては
いけない

アフリカンウィークス2025実行委員会代表
国際社会学部 アフリカ地域専攻 4年
デンベレ ファトゥマタ 花菜 さん DEMBELE Fuatoumatahana

アフリカンウィークスには、アフリカ地域専攻生だけでなく、授業などをきっかけにアフリカに興味を持った学生も運営に参加してくれました。私が主に関わった催しは、留学生制作の映画『Queen of Inanga』の上映とディスカッション、セネガルの楽器「コラ」の奏者・杵淵ちひろさんを迎えてのトークショー、留学生や日本人にアフリカの衣装を着てもらうファッションショーなどです。間違った知識を伝えないう、自分で改めてアフリカの文化について学びました。情報を発信する際に、アフリカの何がとても魅力的なのか言語化することは難しかったのですが、最終的には「五感」に注目して表現しました。

私は西アフリカのマリにルーツを持ちますが、アフリカには、そんな自分でさえも受け入れられない文化があり、以前は「遠い世界、かわる必要のないもの」という認識でした。自分と切り離せない存在であるにもかかわらず、ネガティブな感情や偏見を持っていたのです。この大学に入学し、多様で素敵なアフリカとの出会い・発見がありました。すべてを受け入れるのは難しくても、知ること、向き合うことは諦めてはいけません。偏見や距離感をなくしていくために、自分の経験も伝えていきたいと思います。



ルワンダからの留学生・イレネさんが

コラ奏者・杵瀬ひろさん

ルワンダからの留学生・イレネさんが制作した映画『Queen of Inanga』

コラ奏者・杵淵ちひろさん

日本で得た貴重な経験と知識を
若い世代への教育で共有したい

約7年前、交換留学生として初来日した時、すべてが新鮮で驚きに満ちていました。人が多いのに静けさと秩序正しさを保つ街や、公共の場では他人を気遣う人々の姿勢には感心し、伝統を大切にしながらも現代的で発展した国として存在している点には特に興味を惹かれました。この国についてさらに学びたいという意欲が、再び日本に戻ることを決意させたのです。東京外国語大学で私は、他者の文化を深く理解し尊重することの重要性を学びました。異なる文化のポジティブな側面を受け入れて評価する姿勢が大切であり、自分自身の文化的視点だけでなく急急に結論を下すべきではなく気づかれました。大学のユニークな環境は、グローバル市民としての視野を広げるための重要な入り口でした。日本で得た経験と知識を活かし、若い世代への教育を通じてそれを共有することに、私は強い情熱を持っています。さまざまな形でルワンダと日本の絆を築いていくことを目指します。

大学院総合国際学研究所 博士後期課程
世界言語社会専攻
Peace and Conflict Studiesプログラム 2年
ムレカテテ シュクル さん MUREKATETE, Shukuru

ルワンダ・プロテスタント大学在学中に交換留学生として来日。
2021年に再来日し、東京外国語大学の博士前期課程から
博士後期課程に進学し現在に至る

カメルーン、フーバンの博物館
双頭の蛇の上にクモが乗る印象
は、カメルーン西部に位置した
国の象徴。

ことが
一歩

今回のアフリカンフィークスでは、料理会、アフリカ布の小物販売、ファッションショーの企画・運営を担当しました。「五感で感じるアフリカ」というコンセプトのもと、多様な切り口からアフリカ文化に触れてもらうことで、専門的な知識がなくても楽しめるイベントになり、幅広い層の参加者にアプローチできたのではないかと思います。料理会でウガリを作った際、鍋に少し残っていたウガリを流しに捨てようとした留学生がいたのですが、別の参加者が「日本ではそれをもったいない」と言うよ」と伝えていた場面が印象に残っています。答めるのではなく、対話を通じて自然に共有することこそが、多様性を理解し合う第一歩だと感じました。

私は現在ザンビア大学に留学しています。文化や習慣の違いを実感する日々の中で、何よりも大切だと感じるのは、「文化は人によって異なる」と思います。多様性を尊重する社会の実現は簡単ではありません。価値観に触れている今の私だからこそ、できることがあると感じています。

アフリカンウィークス2025実行委員会副代表
国際社会学部 アフリカ地域専攻 3年
上野 真生 さん
UENO Mao

アフリカ布で作った
手作りのコースターとポーチを販売

ザンビア大学からの交換留学生
生ピリさん。日本食の中では、
お寿司がいちばん好き。

ロピルさん（博士後期）

アフリカの中でも女性の社会進出が進んでいる
ルワンダで短期インターンの経験を持つ池田さん
(国際社会学部 アフリカ地域専攻在籍)

スラム街もあり未婚のまま出産をする女性も多い
中、女性たが必ずしも、そのことをネガティブ
に捉えていないことに驚く。家族感や幸福感の
考え方、社会のあり方に力強さを感じている。

日本とアフリカの距離を縮め
ビジネスチャンスを作る取り組み

アフリカ研究って面白そう、と軽い気持ちで大学に入学したのですが、気づけば卒業後にアフリカを舞台に活動したい気持ちが高まっていました。留学したザンビア大学で、先進国の開発援助のあり方が必ずしもアフリカ側のニーズと合致しないことを知り、ジェトロなら地域に根差した長期的な視点でビジネスに関われると思いました。

アフリカ市場は大きな盛り上がりを見せる一方、インフラ不足、失業問題、一次産品輸出依存といった課題が山積しています。それらの解決と経済成長のため、日本企業が持つ技術力や経験値に期待を寄せる政府・ビジネス関係者はアフリカにはたくさんいます。今年ジェトロでは、アフリカ各国の企業からビジネス課題を募り、それに対するソリューションを日本企業から提案してもらうというスキームを立ち上げました。まずは成功事例を創出すべく、日本・アフリカ双方の企業を全力でサポートし、距離を縮める活動に取り組み

続けたいと思います。



日本貿易振興機構 (JETRO)
ヨハネスブルグ事務所

西浦 梨佳子 さん NISHIURA Rikako

国際社会学部アフリカ地域専攻を2018年3月に卒業後、JETROの事業担当ディレクターとして、主にセミナーや商談会、展示事業などの企画・運営を行う。

ガーナでの留学生活から学んだ 「当たり前を疑ってみる」こと

自分が知らない世界のことを学びたいという思いから、アフリカ地域専攻を志望し、3年次にガーナ大学に留学しました。留学で得た一番大きいものは「前提を疑う力」。日本でガーナについて学び、頭では分かっているつもりでしたが、実際に現地でも生活を始めてみると、衣食住の違い以上に考え方の違いの大きさに驚きました。自分が当たり前だと思っていたことは通じず、逆にガーナの人々にとっての当たり前を一つ一つ理解していかなければなりません。自分が「前提」とらわれていたかを感じました。また彼らの伝統を重んじる精神は想像以上に強く、高等教育を受けた若い世代でさえ例外でないことも、衝撃でした。時にはつらい思いもしましたが、多くの時間は東京にいる時よりも穏やかに過ごしていました。アフリカに対するネガティブな偏見を少しでも払拭できるように、留学体験を通してその魅力を伝えていければと思います。



国際社会学部 アフリカ地域専攻 4年
江川 莉奈 さん EGAWA Rina

TUES African Weeks 2025

くはそれを「もったいない」と言うよ」と話していた場面が印象的
に覚めるのではなく、対話を通じて自然に共有することこそが、多
し合う第一歩だと感じました。

私は現在ザンビア大学に留学しています。文化や習慣の
る日々の中で、何よりも大切だと感じるのは、「文化は人
だと思います。多様性を尊重する社会の実現は簡単に
値観に触れている今の私だからこそ、できることがあ

アフリカンウィーク
国際社会

アフリカ布で作っ
手作りのコースタ

特集 つながるアフリカ Connecting with Africa

相互理解のためにアフリカの学生との交流は欠かせませんが、アフリカからの留学生はまだ少なく、日本の留学生全体の1%程度に過ぎません。本学は学部、修士、博士の各レベルでアフリカ人留学生の受け入れを進めています。学部レベルのアフリカ専攻を持つ日本で唯一の大学であるため、交換留学を通じたアフリカからの学部学生の受け入れに努めてきました。

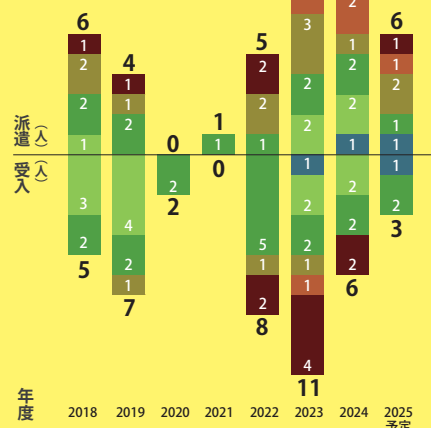
交換留学生の数

(対象：主に学部3～4年)
(2018～24年度実績、2025年度予定)

6大学、9カ国出身
42名が本学に留学

大学別派遣・受け入れ数

■ ヤウンデ第一大学
■ ガーナ大学
■ ルワンダ・プロテスタント大学*
■ プレトリア大学 (南ア)
■ ステレンボッシュ大学 (南ア)
■ ザンビア大学



*旧大学名：プロテスタント人文科学大学（～2023年度まで）

アフリカの協定校数

(2025年5月1日現在)

※サハラ以南アフリカのみ

7カ国・地域
10機関

カメルーン	チャン大学 マルア大学 ヤウンデ第一大学*
ガーナ	ガーナ大学*
モザンビーク	エドゥアルド・モンドラーネ大学*
ルワンダ	ルワンダ・プロテスタント大学*
セネガル	シェイク・アント・ジョブ (ダカール) 大学
南アフリカ	プレトリア大学* ステレンボッシュ大学*
ザンビア	ザンビア大学*

*：学生交流等の協定あり

研究者招へい数

※サハラ以南アフリカのみ



1974～2025年度のべ人数
42人

TUFS アフリカ研究の拠点

本学では、アフリカに関わる4つの組織を通じて

アフリカに関する研究、教育、交流を推進し、相互理解と人材育成を目指しています。

長年積極的に現地へ赴き、アフリカ社会や教育機関と深いつながりを持つ研究者から、

それぞれの組織の役割と可能性についてお話を伺いました。



2023年3月、ケニア西部のルオの人の村落にて、旧友と20年以上以上3りに会う。(photo by 椎野若菜)

ネットワーク作りと情報発信で 「いま」のアフリカを共有する



2024年度秋学期・2025年度春学期の交換留学生5名を見送る
フェアウェルパーティー

アフリカを研究する本学の組織としてはアジア・アフリカ言語文化研究所 (AA研) が言語学・歴史学・人類学の分野で長年活動していますが、政治経済など現代社会に関わる分野をカバーすべく2017年に設立されたのが、現代アフリカ地域研究センターです。活動の目的は、国内外のアフリカ研究・教育のネットワーク構築、さらにアカデミズムを超えて、民間企業、外務省、NGOなどとも協力し、現代アフリカの課題解決に貢献する研究・教育を行うことです。具体的にはセミナーやシンポジウムの開催、アフリカからの研究者招

へい、留学生招致などが挙げられます。またそれらの成果を、出版、ウェブサイト、SNS等で発信することで、広く一般に向けてアフリカに関する情報を提供し、関心を高める役割を担っています。アフリカからの留学生や研究者の記録は、蓄積することでその後の新たなネットワーク作りにつながることを意識し、ウェブサイト積極的にアップしています。

アフリカは今も人口が増えており、今世紀末には世界人口の3人に1人がアフリカ人だという予測があります。今後、日本もアフリカとの関わりは避けて通れなくなってくるでしょう。相互理解のための基礎的な教育をする場はやはり大学以外にありません。大学は研究の成果を咀嚼して、学生を含め一般社会と共有していく役割があります。それはこれからの日本とアフリカの関係を考えると非常に重要ではないかと思います。援助や外交などそれぞれの分野で専門家はいますが、我々はもう少し広く俯瞰的に見られる位置にいるので、それらのつながりを作ることが可能であり、また使命であると考えています。

大学院総合国際学研究院、現代アフリカ地域研究センター長

武内 進一 教授 (写真左) TAKEUCHI Shinichi

研究キーワード：国際関係論／アフリカ研究

大学院総合国際学研究院

佐藤 千鶴子 教授 (写真右) SATO Chinuko

研究キーワード：アフリカ地域研究／土地改革／移民・難民研究



あたらしい社会をつくるヒント Tips for Exploring a New Society

一杯のコーヒーから読み解く アフリカの歴史と私たちとの関わり



雲海に浮かぶダブラ・ビザン修道院 (エトリア)

アジア・アフリカ言語文化研究所 (AA研) が設置されたのは、第三世界に対する日本国内の関心が盛り上がっていた1964年です。以来、言語学・歴史学・人類学を柱に、「臨地研究 (フィールドサイエンス) に基づく共同研究の遂行」「研究資源の収集・分析・編集および研究成果の発信」「共同研究や研修・セミナー等を通じた次世代研究者の養成」を主な使命として、アジア・アフリカに関する基礎的な研究活動をずっと続けています。

AA研ならではの活動の一つが言語研修です。AA研にはアジア・アフリカの消滅の危機に瀕した少数言語の研究者が所属するとともに、世界各地の言語を学ぶことができる言語研修が毎年夏

に開催されています。受講者は研究者を志す人、仕事に役立てたい人などさまざま。アフリカには多数の言語が存在しますが、それぞれの言語はそれを使う人々の記憶や文化と密接につながっています。少数言語はアジアやアフリカの文化を知る上でとても重要なものであり、その研究を維持することもAA研の大切なミッションです。

私自身はアフリカの歴史研究を専門としています。見知らぬアフリカの、しかも過去のことなど、自分には関係ないと考えている方は多いでしょう。しかし、例えばコーヒー一杯にも、原産地のエチオピアからコーヒーが世界中に広まり、人々に愛され、重要な国際商品になるまでの歴史、また悲惨な大西洋奴隷貿易が砂糖の大量生産・消費を世界にもたらした歴史など、多くの歴史を読み解くことができます。全く関係ないと思っていたアフリカとの関わりが、意外にも身近にあることを実感することは、アフリカを知るための重要なアプローチになると思います。

アジア・アフリカ言語文化研究所 (AA研)



アジア・アフリカ言語文化研究所

石川 博樹 教授 ISHIKAWA Hiroki

研究キーワード：アフリカ史／ソロモン朝エチオピア王国の歴史／アフリカの農業と食文化



アフリカのエネルギーを感じて 異なる価値観に触れる面白さを知ろう



にがナス (カメルーン西部州)

本学のアフリカ地域専攻が2012年に新設されてから14年経ちました。当初はまだ「アフリカ＝貧困、紛争」のイメージが強く、アフリカを助けたい、という思いで入学した学生も多かったようです。ただ近年はアフリカの発展のポテンシャルについても一緒に語られるようになってきているためか、「世界史の教科書でアフリカが一番報量が少ないので勉強したい」「ダンスや音楽、ファッションに惹かれて」などの志望動機も増えています。入学後に学ぶうちに意識が変わることも多く、「アフリカは、こちらが助けるどころか日本よりよほど元気じゃないか」と感じるようです。指導する私たちも、アフリカに対するステレオタイプの見方をどうしたら崩せるかは、常に考えています。



大学院総合国際学研究院

坂井 真紀子 教授 SAKAI Makiko

研究キーワード：モラルエコノミー／仏語圏アフリカ／東アフリカの農村開発／農村社会学

国際社会学部
アフリカ地域専攻

フィールド研究の 成果を広く伝え 異文化への想像力を養う



ゆったりした時間が流れるケニア西部のルオ村落

TUFSiCoは、新たなアジア・アフリカ研究の可能性を追求する組織であり、特にフィールドワークを重視した活動をしています。目指すのは、「①社会との共創」「②フィールドアーカイビング」「③フィールドサイエンスの手法の開拓」の3つ。①は、フィールド研究の成果を広く一般の方々に紹介し、そこから新しい研究の形を考えていくものです。例として、小学生の子供たちにカメルーンの森での狩りや遊び、精霊の世界を体験してもらうイベントを行いました。体を動かし、五感でアフリカをリアルに感じてもらうよう工夫しました。その過程は、フィールドワーカーと参加者が共に創り上げる作業でした。②は、フィールドで収集したデータをデジタル化して分析し、新たな知や視点を切り開くこと。また集積したデータを多くの人々が利用できるように公開していきます。③は、最新のデジタル機器を使い、アートや情報学分野など学際的に協働しつつ、新しい調査・分析の方法や表現の方法を開発していくものです。

異文化の理解には相手とよりさまざまな文化的環境への想像力が必要です。その想像力を養っていくことが一つの課題であり、TUFSiCoはその一助になることを目指しています。



アジア・アフリカ言語文化研究所

椎野 若菜 教授 SHINO Wakana

研究キーワード：東アフリカ民族誌／社会人類学



連載コラム「聴く」第13回

きく

映画ソングを聴く インドの 歌しりとり

世界言語社会教育センター「専門・言語学」
石川 さくら 講師
ISHIKAWA Sakura



イラスト＝伊津野 果地

インドで人が集まった時にするゲームの一つにアンタークシャリーがある。これはある一種のしりとりと言ってもいい。日本で普通、しりとりと言うと、物の名前をつなげていくゲームのことを指す。ただ、インドではなんと、それを歌でやる。つまり歌しりとりだ。具体的には、歌の出だし部分を歌ってつないでいく。どこまで歌うかは厳密ではなくて、切りがいいところで次の人にターンを回す。次のターンは前の人の歌の最後の音節の最初の音から始まる。例えば、次のようになる。

ham āpki ākhō mē is dil ko basā dē, to?
ham mūd ke palkō ko is dil ko sazā dē, to?
私があなたの瞳の中にこの心を住ませたら?
私が瞳を閉じてこの心に罰を与えたら?

映画“Pyaasa (乾き)” (1957年)より

tārīf karū kyā uskī, jisne tumhē banāyā
褒め称えよう、君を作ったその人を

映画“Kashmir ki Kali (カシミールの蕾)” (1964年)より

1つ目の歌が to で終わっているので、2つ目の歌は t で始まる。まさにしりとりだ。実はこのゲーム名もそれを表している。ヒンディー語で「最後の (アンタ) 文字 (アクシャル)」を意味する。

歌といってもさまざまだが、アンタークシャリーでは大概、 Bollywoodソングなど映画の挿入歌が用いられる。 Bollywood映画をはじめとするインド映画では、多くの場合、歌やそれに伴うダンスシーンがいくつか挿入される。

映画ソングはおろか、歌だけで紡ぐしりとりなんて日本語でやろうものなら相当な音楽通でないと難しそうだ。しかしインドではこれを皆で楽しむゲームとして行う。インドにおいて映画ソングがどれだけ受容されているのか、このことから推測がつくだろう。新旧問わず、少し有名な歌は多くの人が知っていて、口ずさめる。

このようにインドは映画ソングをすごく「聴く」国だ。インドの民衆にとって映画や歌はとても身近な存在である。映画ソングを聴くことを通してインドのことを知ってみたいくなった方はYouTubeでいろいろ聴けるので、ぜひ試してみてください。

Profile
専門分野は言語学、ベンガル語やヒンディー語などの新时期インド・アーリア諸語。東京外国語大学言語文化学部、東京外国語大学大学院総合国際学研究院、東京大学院人文社会系研究科で学ぶ。修士 (学術)。

連載コラム 五感でふれる 第1回

マンゴーの降る夜「カメルーン」

5月から7月にかけて、学生時代から通っているカメルーン東部州の村に逗留した。赤道よりわずかに北に位置する村は、アフリカ最大の熱帯林の中にある。小雨季にあたるこの時期、村は2種類のマンゴーに恵まれる。

一つは村で採れるマンゴーで、日本で食されるのと同種である。フランスによる信託統治の時代に持ち込まれ、今では街路樹のようにあちこちに植えられている。鈴なりに実ったマンゴーは、熟したのから音を立てて落ちてくる。木熟しのマンゴーは最高においしい。誰が取ってもよいので、マンゴー好きの老若男女は、落ちた瞬間に走り寄る。ただし、大量に実るので、時期も後半になると皆しだいに飽きてきて (今回私は、一日10個以上食べた日もあった)、拾い残しも増えてくる。そうになると、村にたくさんいるヤギやイヌ、ニワトリの出番である。

もう一つのマンゴーは、森で採れる「野生マンゴー」で、生物学的にはマンゴー (ウルシ科) ではなく、*Irvingia gabonensis* (ヘルツィンギア科) という野生樹木の果実である。しかしサイズの卵を少し扁平にしたような形をしており、



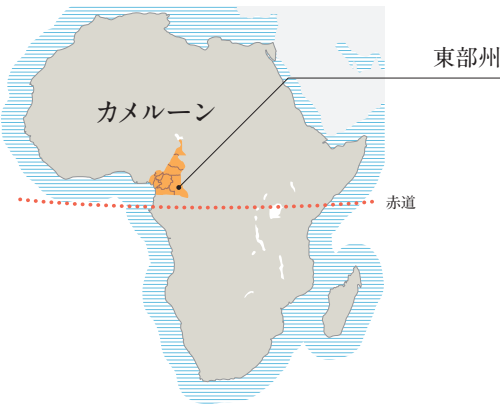
野生マンゴーを割る



野生マンゴー

野生マンゴーの木

村のマンゴー



東部州

大学院総合国際学研究院

大石 高典 准教授
OISHI Takanori

Profile
1978年生まれ。専門分野は生態人類学、アフリカ地域研究。京都大学農学部、大学院理学研究科を経て、博士 (地域研究)。著書に『民族境界の歴史生態学：カメルーンに生きる農耕民と狩猟採集民』 (京都大学学術出版会)、共編著に『犬からみた人類史』 (勉誠社) などがある。

甘くて少しほろ苦いジュシーな果肉に包まれた種子の部分 (イルヴィンギア・ナッツ) を取り出して、調味料にする。ナッツは油脂分に富み、好みの程度に炙ったものを磨り潰して料理に入れると香ばしくてとうとうのソースになる。野生マンゴーの木は森の所々にまともっている。皆それぞれお気に入りの木や場所を持っており、落果が始まると、そわそわしながら採集に出かけていく。野生マンゴーは拾い集めるのは簡単だが、果実を割って中からナッツを取り出すのに手がかかる。山盛りの果実を囲み、おしゃべりしながら、のんびりと作業をする。時々甘い果肉をすずりながら、このナッツは交易品でもあり、欧米にも輸出されている。木を切らずに森林から得られる恵みのことを非木材林産物というが、カメルーンの森の野生マンゴーはその代表選手の一つと言えるだろう。

どちらのマンゴーも昼夜問わずに「降って」くるが、最も採集の効率がよいのは早朝である。朝イチにお目当ての木の下にたどり着けば、足元にたくさん落ちているマンゴーを取り放題だからである。早起きはマンゴーの得。

1
Influential
Faces

歴史を刻む在学生

無限の可能性と友情に恵まれた TUFsでの素晴らしい学生生活



国際日本学部 4年
サラヤラ さん SALAH Yara

Profile
2022年東京外国語大学国際日本学部入学。エジプト出身。言語の美しさや、日本各地を旅して地元の食文化を体験したいという思いが、日本への関心のきっかけとなった。はじめは言語や社会に関する研究に興味を持ち、その後、日本の国際関係への関心が高まり、日本政治・外交ゼミに所属。卒業後は、日本での就職を予定している。

長年の夢だった日本での大学生活では、幅広い分野の授業を通じて、日本や世界についての知識を深めることに力を入れてきました。社会や国際関係に関する多くの授業を履修して、日本が直面している現在の課題に気づくことができ、自分には何ができるかを考えるようになりました。特に日本の高齢化問題と職場におけるジェンダー平等の問題には、重要性を感じています。

TUFsでの学生生活を経験したことで、さまざまな状況や人々に適応できるようになり、難しいけれど美しい日本語という言語を話す自信も身につけました。また、他者の意見を受け入れ尊重しながら自分の意見を表現する能力が身につきました。さらに、いくつかのインターンシップにも参加しています。これらの活動を通じて、卒業後に日本で働

くための十分な経験を積むことができました。勉強だけでなく、TUFsのバレーボールチームに所属し、チームメイトと共に勝ち負けを経験できたことは、ずっと忘れられない素晴らしい思い出です。この経験からは非常に多くのことを学びました。大学生活を振り返った時に、私の最大の達成感と喜びの一つになっています。無限の可能性と素晴らしい友情を与えてくれたTUFsは、私の第二の故郷となりました。



東京都立立川国際中等教育学校附属小学校の多言語教育 (マルチリンガルスタディ) にてエジプト文化やアラビア語を紹介した

2
Influential
Faces

社会における歴史家の役割を考え 知見の発信手法を追究する



大学院博士前期課程
HIPSプログラム 2年
池内海斗 さん IKEUCHI Kaito

Profile
2019年東京外国語大学国際社会学部入学。学部時代、ポーランド留学中にロシア軍によるウクライナ侵攻が始まり、間違った歴史認識が侵攻の正当化に使われるという点に驚きつつ、興味をもつ。大学院博士前期課程に在籍。

現在在籍しているHIPS (公共圏における歴史) プログラムは、歴史系の専攻の中でも非常に実社会に近いところにあります。同プログラムの核であるパブリック・ヒストリーという分野は、一般の人々に向けて歴史を伝えていくことを目的としています。HIPSのパートナー校・中央ヨーロッパ大学のプログラムでは、映像や写真を使って歴史を伝える手法を、自ら制作することでも学びました。こうした多様なメディアや、博物館などの施設を通じて歴史を伝えるという方向で、歴史家の役割が広がっていくといいと思います。

学部時代のポーランド留学中にロシア軍によるウクライナ侵攻が始まり、その中で時に間違った歴史認識が侵攻の正当化に使われることに、非常に興味が湧きました。歴史がどのように政治に利用されるか、その中で歴史家がどのような役割を果たすべきかという点には特に関心があります。各国の選挙や政治状況を見ても、歴史家の研究がしばしば無視され、喧伝される出典の怪しい情報を基に意思決定をする人も多いようです。そのような点からも、パブリック・ヒ



ドキュメンタリー制作授業におけるカメラワーク実践



制作プロジェクト終了後のHIPS生との集合写真

ストーリーを学び、歴史家が知見を発信していくことが重要になっていると感じます。

東京外国語大学は、さまざまな分野に興味を持つアカデミックな人が多いため、私の研究領域を面白いと感じてくれる人も多く、非常に心地よい環境です。この心地よさに甘えず、より幅広い人が知を追うことができる社会を目指して、パブリック・ヒストリーを学んでいきたいと思っています。

HIPS (公共圏における歴史) ……東京外国語大学と中央ヨーロッパ大学 (ハンガリー／オーストリア) が中心となり、日本とヨーロッパの間で合同に展開する博士前期課程 (修士課程) のダブル・ディグリープログラム